

CONTENTS 目次

- 2 目次／特集 いよいよ動き出す「林業新時代」
- 12 まちの話題
- 16 暮らしいきいきコーナー
- 18 市からのお知らせ
- 25 まちの情報掲示板
- 26 施設からのお知らせ
- 32 片岡小学校・川崎小学校 150周年記念行事

COVER 表紙の写真



表紙の写真は、矢板高校3年生の添谷 伊吹さんが高原林産企業組合 白石 盛人さんからチェーンソー操作の指導を受ける様子を撮影したものです。

添谷さんは、小さな頃からの夢を叶え、4月から林業従事者となります。

まだまだごこない手つきではありますが、白石さんの話に耳を傾け、真剣に取り組む姿を見せてくれました。

山と共に生きる



高原山の懐に抱かれた矢板市は、昔からスギやヒノキを主体とする林業が盛んで、私たちの暮らしは山と共にありました。

しかし、昭和55年をピークとして長期的に国産材価格が下落し、外国産材が普及するなど、林業にとって厳しい時代が続いてきました。担い手が減少し、管理ができなくなる山林が増える中、当地域では、価格が安い時期であっても間伐し、その成長を見守ってきました。それは林業の衰退を防ぎ、林業従事者を守ることもつながっていました。

こうして先代より守られてきた本市の林業は、平成30年に林業再生を目指す林野庁の「林業成長産業化地域創出モデル事業」に県内で初めて選定されました。それから5年、官民一体となり林業・木材産業の成長産業化に取り組んできました。各企業・行政それぞれの思いで取り組んだ姿から林業・矢板モデルが見えてきました。それは林業新時代への扉でした――

POPULATION 人口 (11月1日現在)

31,022人 (△13)	出生	12人
男 15,459人 (0)	死亡	32人
女 15,563人 (△13)	転入	76人
13,286世帯 (16)	転出	69人
()内は10月1日との比較	※住民基本台帳をもとに算出	
△は減		

矢板市産材を全国へ

生産者の想いを消費者へ届けたい



有限会社マルハチ
専務 渡邊 尚喜さん（林業歴7年）

時代をつなぐ、それが林業

大切なのは、先代から受け継いだ山を未来につなげること



たかはら森林組合 特別対策室
室長 高瀬 洋之さん（林業歴43年）

矢板市産ヒノキの供給スタート

川中にあたる製材加工業者(㈱マルハチでは、地元の生産者が長い年月をかけて育て上げた木材を加工し、市場へ出荷しています。渡邊さんは、「これからは「矢板市産材」として納めることができるんですよ。こんなうれしいことはない」と誇らしげに話します。

令和4年1月、矢板地域の森林資源の持続可能な利用を推進するための木材の安定供給に関する協定(以下、協定)に新たに消費者(川下)となるハウスメーカーが加わり、「矢板市産材」ヒノキの生産から消費への流通が確立し、安定供給が開始されました。本市の主な利点は、3つ。①良質なヒノキが多いこと、②生産地(山)と製材場(まち)の距離が近いこと、③消費者となる首都圏へのアクセスが良好であること。移動距離が少ないため、低コストで生産から消費への流通が可能になります。これらは、本市が林業モデル地区に選定された理由の一つです。今の日本の木造住宅は、7割が輸入材で建築されています。なぜなら国内に森林が大量にあっても、その流通の仕組みが未熟で安定供給につながらないからです。今回の協定は、この現状を打破するチャレンジの一つです。

産地が見える木材になることで、生産者の想いを消費者につなげることができます。「私たちの熱い想いを届けて、国産材の建物が増えていくとうれしいですね。こんなにいいヒノキがあるんだから」と想いを語ります。(㈱マルハチの挑戦はこれからも続きます。



Forestry

林業はまるで子育て

「若い頃は、毎日毎日山の中を歩き回るのが仕事だった。間伐する木を選定してテープを巻くんですよ。単純ですがごく地味な仕事でね。今になって大事な仕事だったと思うよ。林業のサイクルは半世紀以上かかるからね。自分が携わる時期にやるべきことをやって時代をつないでいくことが大切なんだよ。」伐採期を迎えた山田地区の現場でそう話すのは、たかはら森林組合の高瀬さんです。当組合では、伐採期を迎えた人工林の皆伐再造林を進めるため、地権者と契約し、伐採作業を請け負っています。

成長期の若い森林は、二酸化炭素をどんどん吸い込んで大きくなりますが、成熟した森林では、その吸収能力は低下します。スギで言えば、植えてから10年〜20年くらいの若い頃が一生の間で最も二酸化炭素を吸収し、そこをピークにだんだんと吸収量は下がっていきます。「人間と一緒なんだよ。植えてから10〜20年は元気がよくて代謝もいい。でも下刈り、枝打ち、間伐と世話をしておかないと大きくならない。子育てと同じだね」というので、優しいまなざしで見守っていました。



地域林政アドバイザー
福田 昭さん

「川上」のスペシャリスト

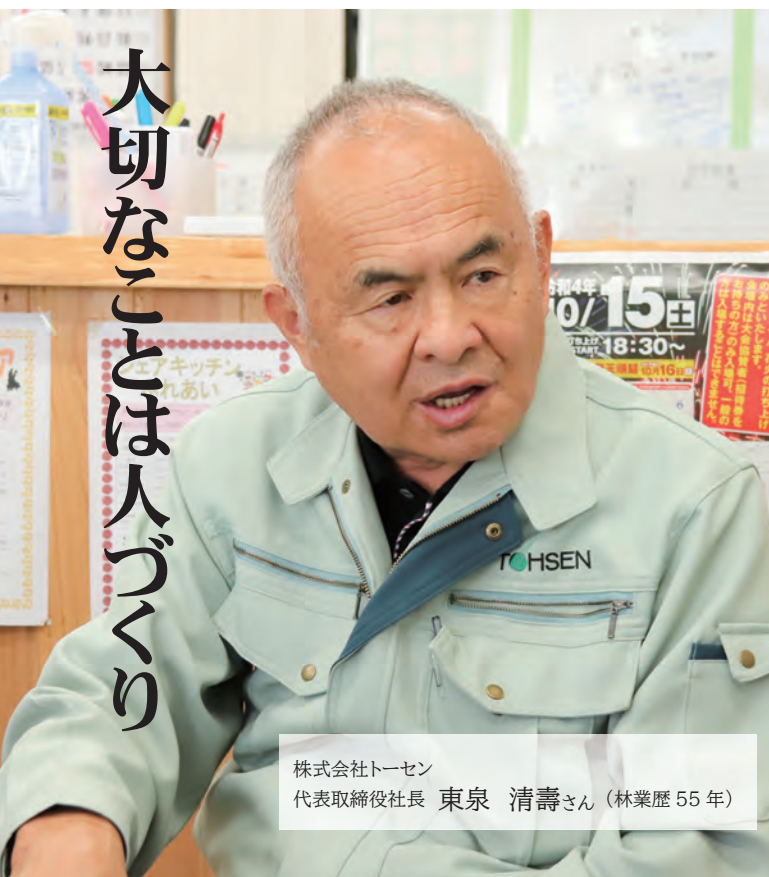
山の状態を見て、目測で売値を試算できる高瀬さんは「川上」のスペシャリストです。誰よりも場数を踏んできたからこそその証です。そして人柄の良さから生まれる人脈の広さ。高瀬さんのおかげで地権者との交渉がスムーズに進み、伐採に至っているのが現状です。また、市内事業者からの信頼も厚く、「高瀬さんが言うなら」と言ってお商談がまとまることも少なくありません。

Interview

見えてきた「林業・矢板モデル」

「伐る→利用する→植える→育てる」
森林サイクルを循環させるために必要なもの

大切なことは人づくり



株式会社トーセン
代表取締役社長 東泉 清壽さん（林業歴 55 年）

「林業従事者不足の解消と、木と共に生活する暮らしがあれば、森林サイクルは循環する」そう話す東泉さんは、トーセングループで、林業界を先導するリーダーづくり「フォレストビジネスカレッジ」と社会全体の意識改革にスポットをあて、事業を展開してきました。

裾野を広げるリーダー育成

グループが運営する「フォレストビジネスカレッジ」では、給料を保証した上で研修を受けながら実践を学ぶことができます。若手や異業種からの転職者などが参加しており、重機を操り伐採を学ぶ人や植林をする人など、希望するジャンルで働きながら学び、将来林業で独立し、安定した収入を得られるようになることを目指しています。スペシャリストを育成することで、林業従事者の裾野を広げることを目標としています。

みんなで植林！林業を知ろう！

林業の中で一番馴染みやすい活動が植林。自分の予定に合わせて植林体験を申し込む植林マッチングシステムがまもなく稼働します。あらゆる方が参加可能で、本格的に取り組む前のトライアル、家族の記念日・思い出づくり、隙間時間の有効活用など、参加動機も自由です。植林の人材確保はもちろん、さまざまな人が参加し、伐採した木を使うことの必要性を感じてもらいたいことがねらいです。



木質バイオマスを使う生活

日本のスギ・ヒノキはすでに伐採期を迎えています。この資源を余すことなく利用するためには、建築材の利用と合わせて山に捨てられていた未利用な木材を使うことが重要です。(株)トーセンでは、それをチップにしバイオマス発電をしているほか、薪直売所で個人利用を促しています。「結構、販売機の利用が多いんですよ」と宮川さんは話します。この辺はキャンプ場が多いこともあり、土日で販売機の薪が売り切れていることも多いと言います。

また市でも、「市再エネ・省エネ機器導入支援事業費補助金」により、薪ストーブや木質ペレットを燃料とするペレットストーブなどの導入を積極的に支援しています。

巻き起こす！林業イノベーション

「矢板市の山には木がいっぱいある、SDGs って言うって林業が注目されてる、今こそタイミングなんだよ」そう話す東泉さんの目標は、「伐る→利用する→植える→育てる」この森林サイクルを市内で循環させること。「昔みたいに」とはいきませんが、「木を使うことが市内の山を元気にする」という意識が必要です。伐採期を迎えた山林がたくさんあり、持続可能な産業として林業が注目されている現在、条件が揃った今こそがそのタイミングです。矢板市林業モデルの成功のカギは、私たち一人ひとりが握っているのかもしれない。



トーセングループ
株式会社那珂川バイオマス・那珂川バイオマス発電所
所長 宮川 俊哉さん（林業歴 23 年）

今必要なのは若手の育成

八方ヶ原周辺の山を中心に管理している高原林産企業組合では、毎年地元の高校での講師やインターン、職場体験などを積極的に引き受け、若い人材の雇用を推進しています。白石さんは、「世代交代・新人育成には本当に力を入れてやっている。数年前に会社の組織編制や給料体制を変更し、若い世代が働きやすい環境を整えた」と胸を張ります。ここ数年、高卒生の就業実績もあり、従業員の平均年齢は 39.6 歳と、近隣の企業と比べて圧倒的に若いことが会社の特徴です。また、機械化が進み多様な働き方が可能になったことを受け、女性の就労に関する規則を整え、現在 2 名の女性作業員も在籍しています。

「男性・女性関係なく将来的に林業全体の知識・経験のある職員になってほしい」そんな思いから新人職員には、「造林・植林・伐採」といった一連の流れを勉強してもらうため、各作業班をまんべんなく担当してもらいます。

長い年月で循環する林業界において、一連の流れを把握するには、若いうちから経験を積むことが有利に働きます。そのため、若手の安定的な雇用の創出は重要な課題です。白石さんは「うちは若手が多い分、現段階では他の企業より多少技術が劣る部分があるかもしれない。でも 10 年後どこにも負けない企業になります」と未来を見据えます。

若い担い手を安全に育成するために

産業別死傷年千人率（休業 4 日以上）の推移

業種	令和元年	令和 2 年	令和 3 年
林業	20.8	25.5	24.7
全産業	2.2	2.3	2.7

年千人率…1 年間の労働者 1,000 人当たり発生した死傷者数の割合
資料出所：厚生労働省ホームページ「職場のあんぜんサイト」

上記のとおり、林業は危険が伴う仕事です。中でも伐採作業は林業労働災害で最も事故が起きやすい作業といわれています。白石さんは従業員の安全確保はもとより、若い担い手を安全に育成するためにも、県のデジタル戦略課の協力を仰ぎ次の 2 つの商品開発に名乗りを上げ、早期完成を目指しています。

経営部門で「林野庁長官賞」受賞

高原林産企業組合は、若手や女性の雇用推進などが高く評価され、大日本山林会主催「令和 4 年度第 61 回全国林業経営推奨行事」で、林業経営部門において、林野庁長官賞を受賞しました。これは、平成 23 年に受賞した農林水産大臣賞に続き 2 回目の受賞となります。白石 盛道代表は、「次はもっと上の賞を」と企業としてさらなる高みを目指します。

Congratulation



高原林産企業組合
専務理事 白石 盛人さん（林業歴 20 年）

①伐採時の安全距離が確保できる「距離測定音声アプリ」

目測のみで正確な安全距離を把握するには熟達した経験が必要。十分な距離の測定方法や対象エリアへの侵入者等の通知システムを搭載したアプリで解決。

②事故発生時に他者へ迅速な連絡ができる「緊急通報ハンマー」

山奥での伐採は、通信手段が無く騒音下で行うため、すぐ近くで事故が起きても気付くのに時間がかかり大事故につながるケースが少なくない。GPS や人の動きを 3 次元で測定し記録するモーションキャプチャシステムを駆使するなど、迅速に SOS 発信することで災害を未然に防止。

「林業は事故になる危険が大きい産業かもしれません。でも、危険を望んで伐採をしている人は誰もいないんです。みんな自然が好きで先人に感謝し、地元の森林を手入れしていることに誇りを持って」と話す白石さん。安全に配慮しながらも効率的な作業を行える環境を整え、従業員を守り育てる事業体を目指します。



森づくりを一緒に



宮川 奈緒子さん (林業歴6カ月)
福島県郡山市出身

伏見 義博さん (林業歴8年)
宮城県仙台市出身

いずれ林業で恩返しを

「植えるときは、苗が根付くように土をしっかりと丁寧に踏み固め、まっすぐ育つようにと心がけています」と語るのは、縁あって宮城県から移住し、本市で植林の仕事をする伏見さん。

多いときは山の頂上と麓を10往復、2人で500～600本もの苗を植えることもあります。「体力勝負の仕事です」と、苗が取り出しやすいようにリメイクしたリュックに約50本の苗を入れ、足場の悪い坂道を慣れた足取りで登っていきます。植林は機械で行うことが難しく、人力で行うしかない仕事です。もともと身体を動かす仕事をしたいと思っていた伏見さんは、「自分にあった仕事なんです」と笑顔で話します。その表情からは、つらさよりやりがいの方が勝り、充実していることが伺えました。

植林を行う時期は春と秋。苗が平等に陽の光を浴び、均等に成長するよう整理させて植えていきます。夏は日の出とともに草刈りを行い、木が成長しやすい環境を整える仕事も担っています。

「将来は、独立して林業の仕事をしたい。今は経験を積んで、人脈を広げる時期だと思っている。支えてくれる人々への感謝の気持ちを忘れず、いずれ世の中に、そして矢板市に林業で貢献したい」と想いを語りました。

伏見さんは、宮川さんを仕事とプライベートのパートナーとして迎え、未来に向けて一緒に歩み始めます。



たくさんの人に林業の楽しさを伝えたい

宮川さんは、趣味のランニングがきっかけで伏見さんと知り合いました。伏見さんの植林に対する想いや活動を聞くうちに林業の世界に心惹かれ、真岡市から移り住み、植林の仕事に携わり始めました。

植えた苗を眺めながら「自分の子どもみたいに感じてかわいいんです」と楽しそうに話す宮川さん。見渡せば急斜面の山の上。足場を確認しながら、苗を植え続けます。「未経験の私でも快く受け入れてくれ、チャレンジする場を与えてくれた東泉社長には、とても感謝している。このご恩を林業で返せれば」と宮川さんの言葉からは未来への意欲が伝わってきます。

今後の展望を尋ねると「私が教えてもらったように、1人でも多くの人に植林の大切さ・楽しさ、林業の良さを伝えていきたい。女性の林業従事者も増やしていけたら」と山を見つめ力強く答えてくれました。

間もなく寒さが厳しい時期を迎え、林業の閑散期に入ります。「将来この時期には、少し長めのお休みをとって2人で海外旅行にも行ってみたいね」と伏見さんに笑顔を向けます。宮川さんは、林業での新しい働き方を切り拓き、進みだしました。



林業の技術と想いを未来につなげたい

「林業の道に進みたい。そう志したのは中学2年生の頃です」と話してくれたのは、来年4月に高原林産企業組合に就職が決まっている高校3年生の添谷さんです。

小学生の頃から森という場所が好きで、森林や木材に興味があった添谷さんは、登下校時に木が植えてある近くの道を歩いている時、整列して植えられていることに気がつきました。「誰がこのように植えたのだろう」「なぜだろう」と興味がわき、林業の道に進むきっかけになりました。

中学2年生の職場体験では林業関係の職場を訪れ、高校2年生で参加できる「林業基礎トライアル研修」にも積極的に参加しました。「林業の現場を、自分の目で見て学べた貴重な時間でした」という言葉からは、目標を掲げ、着実に林業の道に進んで来た足跡が見えました。

就職後の目標を尋ねると、「自分より何倍も大きな木を

切り倒す伐採作業に憧れる。しっかり技術を身に付けていきたい」と目を輝かせました。「地球環境の問題が騒がれる中で、林業は今まで以上に注目される仕事になっている。その仕事に携われることを誇りに思い、取り組みたい。先輩方から教えてもらう技術と想いをつないでいける林業従事者になりたい」と来年からの仕事に想いをはせました。

桜が咲くころ、添谷さんは少年の時から夢見た憧れの世界へ第一歩を踏み出します。

添谷 伊吹さん (林業歴0年)
矢板高校3年



18歳、憧れの道に進むとき



Request



林業コース設置を要望
11月2日「矢板市林業・木材産業人材育成推進委員会」は、矢板高校に林業人材育成コース設置を目指し、福田富一知事に3,477筆の署名と要望書を提出しました。
本市では、林業従事者の高齢化と担い手不足を課題としており、県林業防主権の「林業基礎トライアル研修」に参加する高校生を支援するなど、次世代を担う林業人材育成支援にも積極的に取り組んでいます。
同委員会では、地域が一丸となり、若者を対象とした林業従事者の育成に取り組む必要があると考え、地元矢板高校の農業経営科に選択科目として林業・木材産業を加えることや、高校生が将来、地域の林業・木材産業に就職できるような「林業人材育成コース」の設置を要望しました。

地域おこし協力隊

林業振興チーム「椋」

むく

矢板の林業をさらに元気にするため、市には、現在3人の職員が配置されています。矢板の山を愛する3人は、チーム「椋」と名付けられ、植林や調査などの業務に従事しながら、それぞれの夢にむかって活動しています。

MIRAIBITO INTERVIEW 3 林業に出会った未来人



地域林政アドバイザー（隊長）
大野 賢さん（林業歴8年）
宇都宮市出身

技術指導のスペシャリストに

「ご縁があって今また、こうして林業に関わってるんです」と話す林業経験者の大野さんは、飲食店・ゲストハウス経営など多彩な経歴を持っています。チェーンソーや刈払機の補助講師を務めてきた実績もあり、現在、協力隊の隊長として、2人の作業時の安全を確保しつつ、培ってきた林業知識・技術を伝えていて、「2人が日々上達していく姿を見られるのがやりがい」と、うれしそうに話します。

「矢板の林業は、関係者が連携する仕組みができていて、優れた人材が多く、地理的にも林業に向いている」と話す大野さん。「指導経験を積み、今後は林業の技術指導者として、担い手育成や技術指導を通して矢板市の林業活性化に貢献できれば」と展望を描きます。



地域おこし協力隊
吉田 弘一さん（林業歴7カ月）
埼玉県蕨市出身

森の魅力を、次世代に

子どもの頃から自然の中で遊ぶことが好きだった吉田さんは、宇都宮大学森林科学科を専攻し、高原山の生態系を研究しました。その後、自然体験活動施設に従事する傍ら里山ボランティアに参加するなど、子どもたちに自然の楽しさ・面白さを伝える仕事をしてきました。「森で遊ぶ子どもたちのキラキラとした目を見ると、昔の自分を思い出す」と懐かしそうに笑います。

吉田さんは、「新たに林業を学ぶことで、自分の糧になるのでは」と思い、地域おこし協力隊に応募しました。

「将来は次世代を担う子どもたちに、森の魅力を伝える機会づくりや、矢板市の大切な地域資源である森林の持続的な管理の仕組みづくりに取り組みたい」と想いを語りました。



地域おこし協力隊
室井 拓也さん（林業歴5カ月）
さくら市出身

いずれ、地域に還元できる作品を



室井さんは、17年間メーカー勤務で製品製造をしながら、通信制の大学で会社経営について学ぶなど、「地域のためになる会社をつくる」「モノづくりで自立する」という目標を持っていました。「果物の木で木工品を作ろう」と考えたのは、木工品の材料のほとんどがスギ・ヒノキを原料としていたから。「果物の木はイメージしやすいし、捨てられていたものに付加価値をつけることができる」と、楽しそうに作品を眺めます。今の活動を通じて、林業の知識を広めながら、コップやお皿などの木工品の製作技術を磨きます。「経験を積み、いずれ地域資源を利用した地域活性化に貢献していきたい」と、室井さん。いよいよ夢は、動き出しました。

Recruiting

チーム「椋」新メンバー募集中!

植栽後の山で、シカなどの食害防止に取り組むため、新たなメンバーを募集しています。

私たちと一緒に、矢板の山を元気にしていきましょう!

問い合わせ/

農林課

☎ (43) 6210



詳しくはこちら



Finally

戦前、矢板駅周辺には多くの製材工場が立ち並び、街が形成されていた話を聞きます。

昭和30年代になると、化石燃料などによる燃料革命や木材の自由化などにより、木材市場は安くて豊富な外国産材に席卷されていき、日本中の林業従事者は減少していきました。

しかしながら、矢板市内では国産材を扱う製材工場が存在しつづけ、スギやヒノキといった人工林では間伐を中心とした造林作業が脈々と行われてきました。

現在、矢板市内のスギやヒノキといった人工林は半分程度が50年以上の立派な林齢となり、伐採して木材利用し、再造林する状態になりつつあるのも、そんな先人たちの努力の賜物です。その森林資源を適切に活用し、次世代のための造林をしていくこの継続こそが、矢板モデルと言えるのではないのでしょうか。

今回の特集では、多くのキーワードと共にそれぞれの主役たちを紹介してきました。

「時代をつなぐ」

「矢板産材」

「林業・矢板モデル」

「若い世代」

「地域おこし協力隊」

今こそ、多様な人々が結集し、次世代のために森林を再生していく時代になっています。

本市では、市内の素材生産事業者や製材加工事業者、行政（国・県・市）で組織する矢板市林業・木材産業成長化推進協議会を立ち上げ、林業および木材産業を自律的かつ持続的に発展すべく、主伐再造林の林業を積極的に推進しています。

将来にわたり持続的に森林資源が使えるよう、人材の確保はもとより、矢板の実情に応じた新たな取り組みを展開し、皆さんと共に林業・矢板モデルを創出します。そしてその先にある林業新時代を共に築いていきましょう。